

# 老朽橋の修繕に優先度

## 富山県、官民で検討

橋や道路などインフラの老朽が進むなか、富山県では官民が連携して修復に優先度をつける手法の検討を始める。予算や技術職員の不足を補うものだが、修繕を後回しされる地域への配慮も欠かせない。利用頻度や空き家の発生率など公平で客観的なデータ整備がカギを握る。

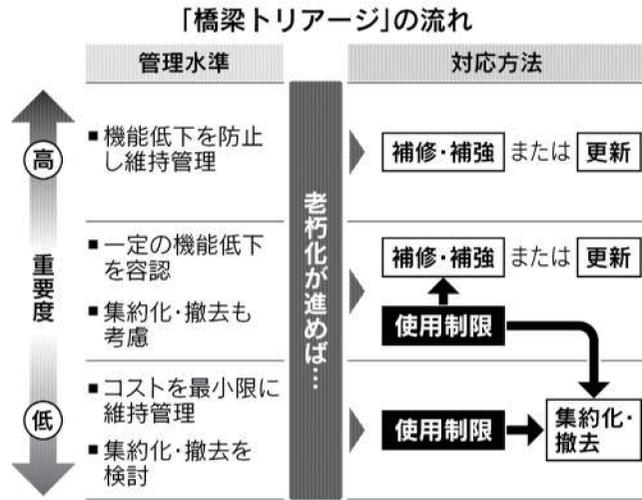
富山県は2026年度に、橋や道路の老朽化対策を議論するインフラ管

### 利用頻度や空き家発生率

## 客観的データ整備カギ



老朽化が進み細かいひび割れが発生した橋脚



理の官民ワーキンググループを設置する。また、国土交通省が打ち出す、市町村の枠を超えて広域に維持管理する「地域インフラ群再生戦略マネジメント」（群マネ）を導入し、第1弾として魚津市と連携して道路維持管理の効率化を図る。ワーキンググループの検討項目の一つが、富山市が16年から進めてきた「橋梁トリアージ」だ。

重要度と健全性に応じて、「しっかり維持・更新するもの」「機能低下を容認しながら維持」などに区分する。高度経済成長期に整備された橋が多くなり、今後に修繕や更新が必要になる時期を迎えるが、「選択と集中」でメリハリをつけて修繕費

災害時などの救急医療の現場で治療や搬送の優先度を判定するトリアージを、インフラの修繕や維持管理に応用するものだ。

用を抑える。これまで、1つの橋を撤去し、通行止め対応は6橋、重量のある車両を使用制限したのは8橋。橋梁トリアージは橋をなくすことを前提にはないが「社会環境の変化で橋の重要度もかわり使用制限する橋が増える」「道路構造保全対策」という。

人口減少に伴いバス路線が廃止されれば、橋の管理水準の引き下げを検討する。近隣の橋が利用でき最低限の往来が確保できれば、使用制限も対策の一つにする。

「インフラ老朽化の予兆を捉えることが欠かせなくなってきた」。こう指摘するのは構造物検査・補修コンサルタントのアイペック（富山市）の東出悦子社長だ。橋梁トリアージを効率的に進めるために、老朽化を遠隔監視するシステムを導入してきた。センサーやカメラを設置してひび割れや傾斜に異常が出れば、即時に管理者に通知する。常時監視で安全性を担保しながら橋を極力長く使えるようにする。

ただ、橋梁トリアージが導入された当初に比べ、橋を取り巻く環境も変遷している。空き家が

増える地域では橋の使用頻度も減る。一方、一般車に比べ重量のある電気自動車（EV）も浸透する。近年目立つ夏の猛暑や、豪雨による洪水や土砂崩れは、橋の部材や土台を支える地盤にも影響を及ぼす。

今後、物流データ、季節要因、災害データを組み合わせ人工知能（AI）で分析して、老朽化の予兆を捉える研究も進めていく。「先手を打って維持管理の確度が高まる」（東出社長）とする。

選択と集中による維持管理など、人口減少を踏まえて持続可能な行政サービスを進める上で、一橋大学大学院の辻塚也教授は「地域をシユリンク（縮小）させないマネジメントが重要になる」と指摘する。効率化と同時に新たな付加価値を生み出すことが欠かせない。富山市の藤井裕久市長も「将来世代に夢ある形をつなぎたい」と語る。

「地域の全体最適につながるインフラ整備は、客観性のあるデータの活用が伴ってこそ」。建設コンサルタントのNiX JAPAN（富山市）の市森友明社長はこう指摘する。

同社は富山高岡市と横浜国立大学と連携して、市内の約1200の橋梁の老朽化を調査し傾向分析をしてきた。微細なひび割れなど耐久性に影響しない損傷と、対策が欠かせない老朽化対策を客観的なデータ分析で区別できるようにした。根拠を明確にして対象

を絞り込むことで点検費用は従来に比べ15%削減できている。「確保した財源を、インフラ整備以外の用途で地域に還元することもできる」（市森社長）。老朽化対策を進める「選択と集中」が、財政運営でも適用できるようになる。（伊藤敏克）